

馴致された放牧牛を生産するために

島根県大田市 佐藤ふぁーむ代表 佐藤重利

放牧の馴致は成牛になってからも可能ですが、その場合かなりのリスクを伴います。そこで、ここでは老人・女性でも扱いの出来る「子牛の馴致（学習）方法」を紹介することにします。以下、母牛が放牧に慣れていることが前提に、概略を説明したいと思います。

第一のステップ（戸外環境の慣れ及び綱への馴致＝子離れ・親離れの必要性）

まず母牛が飼い主に対して、「深い信頼感をもっている（子離れできる）」状態にしておくことが出発点になります。分娩当日は、母牛はかなり興奮していますので、極力刺激をしないよう心がけます（この時なるべく母牛にやさしい「声」がけをする）翌朝になると母牛は落ち着きを取り戻すので、子牛の体重を測定し、その後戸外に連れ出して「戸外の環境」に慣らし、「綱の馴致」をします。

具体的には、「木」と「木」（軒下利用でもよい）にロープを張り（10～15m程度）、ロープには環状の金具を取り付け、それに子牛に着用した面型（おもがた、頭絡）に結び付け自由に動けるようにします。こうすれば、子牛が動き回ってもロープが「しなる」ので、子牛に大きな負担がかかりません。この時に、母牛は子牛の傍に繋留し、いつでも母牛の目の届くところに子牛がいるようにします。子牛にとっては、見るもの触るもの聞くものすべてが初めてのことであり、この行程が戸外環境への慣れを促すとともに、面型（おもがた）を着けることによつて「綱」の馴致もできるのです。

また、これと平行して歩行訓練も行います。最初から長い距離を歩行させるのは無理ですから、少しずつ気長にすることが大切です。一方、母牛に対しては「子離れ」の準備をします。母牛を子牛から離し、牛舎に入れる際に飼槽には好物の餌（濃厚飼料）を入れておき、係留している綱を解いた時に母牛が自然に牛舎に帰るようであれば、第一段階は成功です（この際子牛はロープに繋がれたままの状態にしておく）。この段階の馴致期間は子牛の状況にもよりますがおおむね1週間あれば終了できると思います。第一段階が終わった頃には子牛も環境にも慣れ、歩行する足取りもしっかりし引き運動も可能な状況になります。

中山間地域では管理できない農地をはじめ耕作放棄地が年々増加し、地域住民はこれらの放棄地を管理する体力も気力も失いかねているのが実態です。その解消策として、いま里地・里山放牧が脚光を浴びていますが、「放牧できる牛」の絶対数が不足しており、「放牧に馴致された牛づくり」が急務となっています。現在、一部の農家が取り組まれています。全体的に見ると馴致はあまり進んでいません。放牧の馴致は成牛になってからの可能ですが、その場合かなりのリスクを伴うため、放牧への取り組みを躊躇する場合があります。そこで、ここでは老人・女性でも扱いの出来る「子牛の馴致（学習）方法」を紹介することにします。



（近中四農研センター高橋佳孝さん撮影）

以下、母牛が放牧に慣れていることが前提に、概略を説明したいと思います。

第二のステップ（電気牧さくの馴致と牛同士の触れ合い）

牛舎に隣接する運動場（パドック）に連れ出し、電放への馴致をしますが、この際、子牛の気が散らないように他の牛は外に出さず、親子だけで実施します。まず子牛に面型（頭絡）を着用し、追い綱（おいづな）をつけ、運動場に出します。

（これは第一のステップで訓練していますから容易にできるはずです）子牛の鼻元に電線に触れさせ、電気の怖さを初体験させます。これをパドック内の何箇所でも繰り返して行います。この時、母牛は心配しそうに駆け寄ってきますが、飼い主との信頼関係があれば、飼い主に危害を加える



（近中四農研センター高橋佳孝さん撮影）

ことはありません。この段階では、環境に慣れるのが主目的であり、短時間で終わるのが「コツ」です。その後、牛舎に連れ戻すわけですが、母牛は「子離れ」の訓練がしてありますから、ゲートを開ければ母牛は牛舎に戻ります。そして子牛も母牛について牛舎に入ります。

ここで大事なことは、第一のステップで母牛が牛舎に戻る（子離れ）訓練ができています。この訓練を怠ると、母牛は子牛が気になって、なかなか牛舎に帰ろうとはしません。この状態が長引くと、脱さく・事故などが発生する恐れがあり、注意が必要です。運動場及び電気牧さくの馴致が順調に行けば、少しずつ時間を伸ばしながら、2～3回繰り返します。（この時子牛は電線に自然



体で触れることがあります。これが後ほど役立つのです）その後は、徐々に他の牛との触れ合いをさせ、集団の中での行動を注意深く観察します。ここまでの馴致が上手くいけば次の段階に進みます。このステップも1週間程度を目安とします（最初のステップと合計で2週間程度）。

4・第三のステップ（親子放牧の実現）

さあ・・・いよいよ放牧場に子牛を出します。飼い主は期待と不安が交錯していると思いますが、ここは勇気をもって挑戦してください。今までのステップがうまくできていれば、必ず期待に応えてくれるものと確信しています。

この場合、第2ステップの場合と同様に、子牛の集中力が保てるよう、最初は親子一組だけで行った方が良いでしょう。放牧場内の点検、電柵の確認をし（この場合、二段ないし三段張りおもがたがよい・・・脱柵する恐れがあるため）、子牛には面型を着用し、綱をつけ、放牧場まで連れて行きます。放牧場でも、鼻元に電線に触れさせて電気の怖さを体験させます。その後、綱を着けたまま子牛を放し、しばらく様子を見ます。最初から長く放牧場におくのではなく、短時間で下放させるのが「コツ」です。ここでも最初の目的は、環境に慣れさせるのが狙いです。これも2～3回繰り返し、徐々に時間を長くしながら、慣れてきたら他の牛との触れ合いをさせるのです。

この場合、母牛は子牛の体調に合わせ行動を取るようです。そのため、他の牛とは別行動（集

団とかけ離れる)をとるようになります。また、子牛に十分な体力がないため数分間隔で休憩(横臥状態で)をしているようです。このこと(横臥状態を繰り返すこと)が、環境に早く馴染むことにつながり、子牛の将来にも役立つことになります。

放牧馴致はなるべく早い段階で実施する方が、事故率は少ないと思います。逆に言えば、遅くなるほど子牛には体力が付き、行動力が旺盛になり、勢い余って電線を飛び越える危険性も高くなりますので注意が必要です。

下牧させる場合は、細心の注意を払いながら、親子一緒にゲートまで呼び寄せます。(運動場とは違う・これは牛舎が離れているため、慎重に行います)必ず親子が揃ったことを確認してからゲートを開け、母牛を先に外に出し、その後を子牛がついていくように仕向けます。子牛も集団生活に馴れ、落ち着いた行動をとれば、親子放牧はほぼ成功したと確信しても良いと思います。

5・第四のステップ(応用編)

親子放牧が上手くいけば、次に応用編としていろいろな活用方法が考えられます。子牛は順応性が高く、一度学習すると脱柵することはまれですので、果樹園の下草刈り・後作の掃除刈りなど、短時間の放牧に母牛と一緒に出すことができます。子牛はいつでも母牛の傍に寄り添い、のんびりと過ごしている光景は本当にほほえましいものです。子牛が放牧に慣れてさえいれば、いままで母牛を放牧していた延長線上での親子放牧を行えると思います。

また、管理の仕方次第では無限の可能性を秘めています。「子牛がいるので放牧は出来ない」との考えの方が強かったと思いますが、親子放牧ができれば以前よりも長く放牧に出せ、草地の管理ができるので、ぜひ実行していただきたいものです。その際に、親子放牧の期間は3か月程度を限度としておくのがベターと思われます。3か月を過ぎれば子牛は商品価値を高めるための飼育方法に変え、無理をして放牧を継続する必要はないと考えます。

6・むすび

以前から私は、里山・里地放牧を何とか親子牛でできないものかと思案し、また、理想像として描いておりました。親子牛が草地の管理の一翼を担って、草を食む姿は何とも素晴らしいことではないでしょうか(牧歌的でもある)。このためには、どうすれば良いかを考え、自分なりに試行錯誤しながら実行しました。

大切なポイントは、母牛が放牧に慣れていること 飼い主と母牛は深い信頼関係を保つこと 子牛の学習は手順を踏んで段階的に実施すること 放牧地は牛にとって快適な環境にすること 牛の観察を通し「牛」の身になって管理すること、などが上げられます。誰でも出来る、特に老人・女性でも出来る親子放牧が広がれば、今後ますます放牧の裾野が広がり、馴致された子牛が増えてくるものと思います。

放牧慣れしていない親牛を馴致しようとするれば、大変なエネルギーを使わなくてはなりません。その点、子牛は扱っても楽ですし、しかも呑み込みが早く、一度覚えるとまず脱柵することは考えられません。放牧の作法(馴致)が身に付いた子牛は、一生涯付加価値の付いた宝物でもあります。ここで紹介した方法であれば、馴致された子牛が、仮に脱柵しても母牛はあまり動揺はしません。飼い主が落ち着いて対処さえすれば、何の問題もなく、うまく納まります。この際ぜひ子牛の学習を通し、「馴致された牛」づくりに頑張ってもらいたいと思います。また、このような「牛」を飼い主の下で、自由にコントロールしながら「農地」・「荒廃地」などを管理に活かされれば、日本の農業の新たな方向が示されるかも知れません。大いに期待したいと思います。